

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高大接続改革の中で、高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、各大学の個別選抜や総合型選抜等を含む大学入学者選抜全体において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な英語力を評価することが求められている。共通テスト「外国語（英語）」は、「リーディング」形式と「リスニング」形式の問題を通して、文字や音声による試験の特徴を生かしながら、以下のように可能な限り総合的な英語力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、英語を「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り], [発表]」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙、表現、文法等に関する知識や技能についても、上記の力を問うことを通して引き続き評価する。
- 「リーディング」、「リスニング」ともに、共通テストの問題のレベルは、出題範囲としている科目（「英語コミュニケーションⅠ」、「英語コミュニケーションⅡ」及び「論理・表現Ⅰ」）の目標及び内容（言語活動の例、言語の使用場面や働きの例など）等に対応したものとす。その際、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるよう、引き続き、CEFR の概ね A1～B1 レベルを目安として問題のテキスト、使用する語彙、タスクなどを設定し、問題を作成することとする。
- 「リーディング」の表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」の音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。また、読み上げ回数については、1 回読みと 2 回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・ 第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要・要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。音声は2度流れる。

第1問の難易度はおおむね適切であったが、問4では、音声にある“cold”が誤答①に“colder”として含まれていることから、この選択肢を選んだ受験者も一定数いたと思われる。問7と問8も難易度の高い問題だったが、識別力はあったと思われる。発話全体の意味ではなく、特に後半部分にある単語のみを頼りに解答すると誤答を選んでしまう可能性がある。
- ・ 第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。音声は2度流れる。

第2問の難易度は全体的に高く、特に問11については、イラストが多少分かりづらかった可能性もあり、成績上位層にとっても難しかったと思われる。
- ・ 第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にし

ながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：確認、依頼、誘い等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問13と問17をイギリス英語による発音とした。また、この大問から音声は1度しか流れない。

第3問の難易度は例年に比べて高めであった。特に問13は、成績上位層以外の受験者にとっては難しかったと思われる。中位層以下では、聞こえてきた単語を頼りに判断してしまったり、正答①の“accustomed”が理解できなかつたりした可能性がある。

- 第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通じて、話し手の意図を把握する力を問う。また、第1問の文（2回読み）・第2問の対話（2回読み）・第3問の対話（1回読み）から、長めのモノローグに移行する設問としてのつなぎの役割を果たしている。

問18～21は、別の建物への移動に関する話を聞いて、ルートを示す絵を選び順番に並べる問題であった。与えられた選択肢には不要な絵が1つ含まれており、さらに得点を得るには全問正解する必要があるため難易度は高かった。また音声の最初に「橋」の説明があったことで、橋の絵である③が最初に選ばれやすかったと思われる。

問22～25は、クラブ活動発表会のスケジュールの最新情報を聞いて、表を完成させる問題であった。難易度は適切な範囲であった。時間と場所のいずれかが変更されたものや、変更なしのものなどがあったが、聞こえてきた順番に解答できたため解きやすかったと思われる。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を1つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。四人の話者は、アメリカ英語、イギリス英語、日本語など、異なる母語の話者であった。

キャンプ先を決めるために、イベント会場で四人の説明を聞き、考えている条件に最も合うキャンプ場を選ぶというものであった。本試験と同様に全ての条件に直接触れていない選択肢もあったが、この種の問題に関しては受験者の対策が整っているように感じられる。

- 第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、①メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力、②聞き取った情報を他者と共有したり、話し合ったりする力、③聞き取った情報と問題文中に示されたグラフ資料を統合的に処理する力を問う。

トピックはリスと森林環境で、リスの特性、並びにそれがもたらす森林への影響に関する講義を聞く形式であった。難易度が高い大問であるが、おおむね適切な範囲であったと考える。

問32は、本試験同様に特に難易度の高い設問だったと思われる。二人の学生の比較的短めの発話を聞いて、それが講義の内容と一致しているかどうか問われているが、講義のどの部分について問われているかを瞬時に判断することが求められるため、認知的負荷がかかりやすかつたのかもしれない。成績上位層にとっても難易度が高かつた可能性があり、今後の問題作成においても引き続き留意していきたい。

- 第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。

今回は来年のカレンダーを決めようとしている二人の会話を聞き、会話の主旨を判断させた。問34と問35は共に適切な難易度であったが、問34ではより正確な聞き取りを要する選択肢であった。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を理解し、更に特定の話者の意見を支持する図表データを選ぶことを通じて、必要な

情報を把握・統合し判断する力を問う。

自分たちのウェブサイトを開鎖すべきかに関する三人の意見交換を聞き、話者の立場を判断させた。昨年と同様に、話者の人数は三人とした。また、これまでと同様、男女の声の違い、異なる種類の英語、話者が互いの名前を呼び合うことにより、登場人物が区別できるようにした。

問 36 はウェブサイトを開鎖したいと思っている話者の名前を問うた。昨年度の本試験及び追・再試験では条件に合う話者の人数を問うたが、どちらの形式にも一長一短があり、作成された会話の特性に応じてどちらの形式にすべきか判断する必要があると考える。

また、問 37 は適切な難易度であった。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

今回の共通テストは、平成 30 年告示の学習指導要領に基づく教育課程の下で実施される 2 回目の試験であった。前年度の 1 回目において第 5 問が大きく見直されたが、2 回目であることから受験者は新しい形式に慣れてきたと思われる。また、追・再試験における第 5 問のワークシートでは、矢印を加えるなどして項目同士の関係性を分かりやすく提示するよう工夫した。この点については、高等学校教科担当教員より「ドングリを持つリスのイラストに加えて、リスの行動の違いによって異なる結果が生じる様子が矢印を用いて表現されており、講義の全体像を分かりやすく整理するものとなっていた」という評価を頂いた。今後も第 5 問のワークシートを作成する際にはこうした工夫を取り入れることも選択肢としたい。

全体的な構成・内容について、高等学校教科担当教員からは、知識・技能を問う問題だけでなく「思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる内容がバランス良く出題されている」との評価を受けた。教育研究団体からも「日常生活や学校生活に即した場面を扱い、聞き取った情報を整理・判断し活用する力を問う出題がなされており、技能統合的な英語力を評価する試験として適切な構成であった」との講評を頂いた。

今後も、多様な英語の音声を用い、思考力・判断力・表現力等を必要とする、話者の意図、含意と文脈、内容理解を問うような問題、受験者が既存の知識や体験を集結させながら解く問題、身近な暮らしや社会に関わる題材で、日常生活で用いられる自然な英語を体現した問題の作成を続けていきたい。

一方で、出題に関して懸念される点も幾つか指摘を受けた。以下に主なものとそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・ 第 2 問の問 10 に関して、棚の整理をしている女性と、話し相手の男性との関係がやや曖昧であることなど、教育研究団体から「イラストや場面設定には改善の余地がある」との指摘を頂いた。場面設定は受験者に聞く準備をさせる上で重要な情報源であるため、さらに慎重に検討していきたい。
- ・ 教育研究団体から「一部の設問においては本試験と比較した際の難易度差が生じる可能性も考えられる」という意見を頂いた。今後もより注意して参りたい。

その他、選択肢として与えられるイラストの違いが分かりづらいものもあったとの指摘を受け、一層の配慮をしつつ、問題作成に取り組んでいく。

4 まとめ

本試験の平均点が下がったが、共通テストの出題形式に受験者が慣れてきたこと、受験者が 4 技能の学習を強化していること、小学校からの英語学習経験によりリスニング力が全体的に向上していることなどを考慮すると、平均点の上昇に歯止めが効かなくなる可能性がある。引き続き、適切

な識別力を持つテストとしての問題作成に努めて参りたい。

一方で、教育研究団体からは、「難易度の調整に当たっては、情報量や作業量の増加ではなく、語彙や話題の抽象度、発話速度などを工夫することで、『聞く力』を適切に測ることが望ましい。追・再試験においては、本試験と同等の評価が行われることが求められるため、今後も難易度や負荷のバランスに十分配慮した作問が期待される」という重要な指摘を受けた。難易度の調整に留意しつつ、認知的負荷の増加が識別力の低下をもたらさないよう努めたい。

高等学校教科担当教員によると、「4技能5領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目標としている学習指導要領の方針が、本テストの問題内容に十分に反映されていることを踏まえると、高等学校等における今後の英語指導は、思考力・判断力・表現力等の向上を目指した授業展開をより一層推進することが期待される」とあり、共通テストの高等学校の授業への波及効果が大きいことは明らかである。さらに「外国語の学び方や指導の仕方にメッセージを与える試験」という意見もあり、このことを念頭に置きながら今後の作題に取り組むことが求められる。

本テストは、4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に集約しており、また様々なコミュニケーションの場面や状況を設定し、学習指導要領の方針を汲んだものとしている。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。問題作成部会としては、こうした方向性については今後も継続しつつ、適切な負荷設定と継続的な改善に努めて参りたい。